

「南洲翁遺訓」について

第六話

第二十一条 敬天愛人の道を踏み行っていくための心の修養の重要性

第二十二条 己に克つための日頃の訓練の必要性

九州の南端に在る薩摩は辺地（へんち）と思われがちだったが、決して文化果つる地ではない。海のほとりにある開放感のある透明な明るさを感じる文化的な藩であった。例えば、小京都として名高い山間の知覧の里には、今も古（いにしえ）のままの武家屋敷が連なり、それぞれの小庭には比叡山に似た借景（しゃっけい）を持つ大刈込（おおかりこみ）と岩組で、素晴らしく精妙な枯山水（かれさんすい）の空間を描き出している。知覧は小生の父の生家でもあった。



また錦江湾（きんこうわん）の上に立つ桜島を城山から眺めた景色は、東洋のナポリと称されている。島津という一支藩に、このような生活文化が育っていたことは、恐るべき文化潜在力の一端を示すものであろう。西郷も、従道も、大山も、東郷もこの文化環境が生み出したものであった。



さて、時の状況や死の症状から由良派の毒殺説が流れた斉彬の急死に、京で主君を待っていた西郷は、主君の墓前で腹を切ろうとまで思いつめた落胆ぶりだった。だが勤皇派の「僧の月照」に主君の志を継げと諫（いさ）められ、立ち直り、再び志士として活動を始めた。

しかし時代は、井伊直弼が大老となり安政の大獄が始まっており、梅田雲浜や松陰、橋本左内等の志士が、幕府によって命を奪われる最悪の事態に突入していた。西郷は幕吏（ぼくり）に追われた月照を匿（かくま）い、薩摩に連れ帰った。悪いことに由良の子の久光が権力を握り、もはや西郷は「陽の当たる場所」には居なかった。

斉彬の時代から方向転換した当時の藩は、井伊を恐れた久光が月照の「日向送り（ひゅうがおくり）」を命じた。日向送りとは、船上での事実上の殺害処分の命令であった。絶望した西郷は月明かりの錦江湾に月照を連れ出し、月照と強く抱き合って海へ飛び込んだ。しかし天命は月照のみを殺し、二日間人事不省の西郷を弟達や税所篤（さいしょあつし）、大久保等が必死で看護し蘇生させた。



月照が隠れていた宿屋跡地に建つ石碑

処置に窮した藩は、幕府の目をはばかって、彼の身柄を密かに奄美大島へ送った。ここでも天は彼を必要としたのか？安政の大獄から西郷を救う結果となった。同時に流人となっていた重野安繹（しげのやすつぐ＝後の東大文学部教授）は、「西郷は、この後は和尚を殺し自分が生き残ったことを深く詫び、終始死を思う気持ちが強く、命日には供養を欠かさなかった」と述べている。17回忌にさいし、墓前に法要したおりの一詩を捧げている。

相約（あいやく）して淵（ふち）に投ず 後先なし
 あにはからんや 波上再生の縁
 頭（こうべ）をめぐらせば 十有余年の夢
 空（むな）しく幽明（ゆうめい）をへだてて 墓前に哭（こく）す

安政の大獄以後の流島という雌伏（しふく）の時代に、後の飛躍のエネルギーとしての蓄積は日本思想史に大きな影響を及ぼした儒教の教え、特に佐藤一斎の陽明学の「天人合一思想」から得たものが多かったであろう。この雌伏の時代に西郷は死と向かい合う環境の中で精神的に大きな悟りを得たことは間違いなからう。南洲遺訓で頻出する「天」、「道」という言葉は思想の最重要概念である。これは西洋思想の「個人」が完全に世界を主宰し、把握する主人公に人間自身が成る……との思想とは異なる。

注) 陽明学

中国の明代に、王陽明がおこした儒教の一派で、孟子の性善説の系譜に連なる。陽明学という呼び名は日本で明治以降広まったもので、それ以前は王学といていた。形骸化した朱子学の批判から出発し、時代に適応した実践倫理を説いた。心即理・知行合一・致良知の説を主要な思想とする。吉田松陰、高杉晋作、西郷隆盛、河井継之助、佐久間象山らが影響を受けた。

西郷は「天」という、人間を超越した者から宿命的な使命を与えられ、それに合致することで行動する強い動機を獲得するのだという概念を得た。「天」から与えられた役割（使命）を果たすという強い宿命感を持ったからこそ、幕末の維新革命運動を可能にする能動的エネルギーが生まれたのである

人間は“天”に抱かれ、ある種の宿命をもって生まれて来た、故に、「自分には果たすべき使命がある」との強い自負心を西郷は抱くが、故に、激しい自己規律、自己を恃（たの）む克己心は天に支えられることで生まれたのであろう。

西郷は、若い頃に伊藤潜龍と春日潜庵（京都）の門下生であることが彼の人格形成の上で重要である。西郷は自己形成をするうえで“道”とか“天”をどの様に心の糧として理解していたのであろうか……を知りたい。

【遺訓 2 1 条】

道は天地自然の道なるゆえ、講学の道は「敬天愛人」を目的とし、身を修するに克己（こっき）を以（もつ）て終止せよ。己に克つの極功は「母意（いなし）

母必（ひつなし）母固（こなし）母我（がなし）『論語』と言えり。総じて人は己に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ。能（よ）く古今の人物をみよ。事業を創起する人その事大抵十に七、八迄は能く成し得れ共、残り二つを終り迄成し得る人の希（ま）れなるは、始めは能く己れを慎み、事をも敬する故、功も立ち、名も顕（あらわ）るるなり。功立ち名顕るるに随（したが）い、いつしか自ら愛する心起こり、恐懼戒慎（きょうくかいしん）の意弛（ゆる）み、驕矜（きょうきょう）の気漸（ようや）く長じ、その成し得たる事業を負（たの）み、苟（いやしく）も我が事を仕遂げんとて、まずき仕事に陥（おちい）り、終（つい）に敗るるものにて、皆自ら招く也。故に己に克（か）ちて、睹（み）ず聞かざる所に戒慎（かいしん）するもの也。

（訳）

講学の道とは学問に努めるということである。学問の目的は“敬天愛人”におく。西郷のいう“道”とは、天地のおのずからなる道理、即ち「天道＝誠」のことである。誠実、誠を尽くすことが天の道であり、その天の道に従い生きることこそが人の道だといっているのである。では天とは何を意味するかというと、人を越える尊きもの・道理・宇宙の真理と訳すべきか？ 道理を慎み守るのが“敬天”である。また人は皆自分の同胞であり、仁の心をもって全ての人々を愛するのが“愛人”である。

南洲翁は後の「私学校」の綱領の中にも「皇（みかど）を尊び、民を憫（あわれ）むことを学問の本旨とされている。天地自然に従い、誠の道を大切に守りながら、人々を分け隔てなく愛することが、学問の道だと言っているわけである。

この様な目的で学問するには、また己の修養をするには「己に克つ」ということを常に心がけねばならない。その理由は「意なし＝当て推量をしない。必なし＝無理押しをしない。固なし＝固執しない。我なし＝我を通さない」ということだ。即ち人間には、我利・我欲・我見・我執・我が儘という虫がついて、可能の芽を枯らしてしまうことが多い。この虫を払うことは、己に克つことであって、学を修める必要条件である。すべての人間は己に克つことによって成功し、己を愛することによって失敗するものだ。敬天愛人という道を踏み行っていくには「自分自身の心を修養しなければならない、そして自分の身を修めるには克己をもって終始する」とも西郷は述べている。

現代流に表現するならば「煩惱にまみれそうになる自分自身を押しえつける」ということになる。人間というものは、肉体を維持するために創造主から欲望と

いう本能が与えられている。人間は一般的に無知蒙昧（むちもうまい）であるが故に、「愚痴」をこぼし・「欲望」をむきだし・「怒り」をあらわにする。この三ツは煩惱の中でも一番強い、故に仏教では三毒と称し、放っておけば、この三毒が常に心の中を支配しがちだ。この煩惱を抑えることこそが「克己」なのだ。

西郷は「総じて人は己に克つを以て成り」と教えている。即ち、「心の中に常に湧き起ってくる煩惱、特に三毒を自分の意志の“力”で押さえつける“力”付ける事が教育の本分である」と言える。現代の教育界では、それを教え示す教育者は稀である。古今の人物をよく見るがよい。

事業を行う者は、十に七・八まではよくやるが、残りの二を完（まっ）とうする人は少ない。己を慎むことにぬかりがあるからだ。少し成功すると驕（おご）り高ぶり、我利・我欲・邪念が湧き出る。正に「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難（かた）し」との格言の示す如く、己に克つことは甚（はなは）だ難しいのである。故に西郷は克己勉強を流島によって実践し、また他にも強調されている。

学問については小生も意識している教えがある。それは「大学」という四書の中の本には「大学の道（目的）は明德を明らかにするにあり、民に親（した）しむに在り、至善に止（とど）まるに在り」……と。「大学」の教えとは、天道天徳は何かを自覚し、人に親しみ人を愛することだ、そして人倫道義に従って立派な社会・国家を創る……の意である。西郷の「敬天愛人」によく通じている。

注1) 四書

儒教の経書のうち『大学』『中庸』『論語』『孟子』の4つの書物を総称したもの。

注2) 大学

朱子学において自己修養から始めて多くの人を救済する政治へと段階的に発展していく儒者にとっての基本綱領が示されているとして重要視された。その内容には「明明徳」「親民」「止於至善」の三綱領と「格物」「致知」「誠意」「正心」「修身」「齐家」「治国」「平天下」の八条目が提示されている。

西郷が私淑（ししゆく）された島津斉彬公も学問の本旨を「天地の法理を究（き）わめ、人倫の大道を明らかにし、これを躬行（きゅうこう）実践して、国家有用の材たるに在り」……とされ教育の目的を人材教育におき、それには天地の理法（天心）を究め、人の正しき道を明らかにする事だとされている。「総ては世

の為、人の為に在るのであって、自分の為だけにあるのではない」という教育の本分を知らしめることが現在こそ必要であろう。

【遺訓 2 2 条】

己に克つに、事々（ことごと）物々（ぶつぶつ）時に臨（のぞ）みて克ち得られぬなり。兼（かね）て氣象を以て克ち居（お）れよと也。

（訳）

この 2 2 条は、2 1 条の補足である。己に克つためには、日頃からの訓練がなければ、頭でわかっている、いざとなると出来ないものだ。日頃からの訓練で自分の強靱（きょうじん）な性格（気性）、いわば自らの血・肉となるようなトレーニングが必要だと言ひ聞かせているのである。

四書の「孟子」に「受任者」という有名な文章があるので、それを写し第六話の終りとする。

「天の將に大任を是（こ）の人に降（くだ）さんとするや、必ずその心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、その体膚（たいふ）を饑（うえ）しめ、その身を空乏（くうぼう）にし、行いには其の為す所を払乱（ふっらん）す。心を動かし、性を忍び其の能（よ）くせざる所を曾役（ぞうえき）する所以（ゆえん）也」

西郷の流島の如きは、正に天の降ろした受任者であって、克己と気性をもって一貫されている。今の教育には、学ぶ真の目的を教えない大きな欠点がある。

令和元年（2019年）6月16日

志雲会代表 有馬正能